

## 第4章 2区の調査成果

### 第1節 2区の概要 (第86図)

2区は、1区と同様に昭和50年代後半の圃場整備事業による削平が著しく、遺構面のかかなりの部分が失われていた。このため、検出作業の結果では、縄文時代晩期から中・近世にかけてのわずかな遺構しか遺存していなかったが、遺物は、縄文時代晩期の土器及び石器類を中心に大量に出土しており、集落の存在を窺わせる。

縄文時代においては、土坑1基(SK17)を検出した。出土遺物から、晩期前半ごろのものと考えられ、土器の廃棄土坑としての性格が考えられる。

古墳時代から古代においては、溝1基(SD6)、自然流路3基(流路1～3)を検出した。出土遺物からSD6、流路1・2が後期後葉から末葉ごろ、流路2が奈良時代末から平安時代初頭に堆積したものと考えられる。

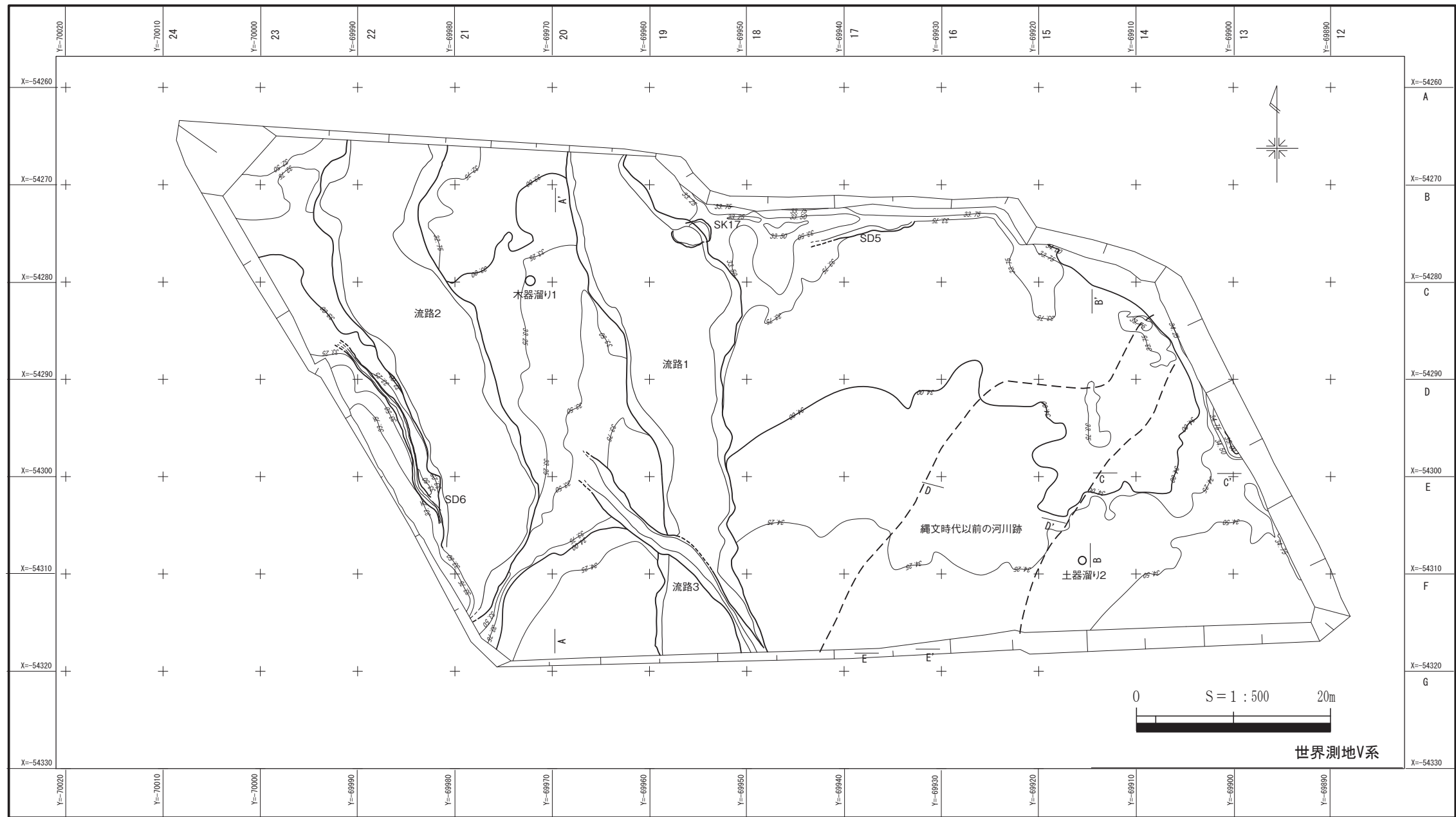
中世においては、溝1基(SD5)を検出した。その他、土器溜り2では、京都系土師質土器皿が重なって出土している他、木器溜り1からは桶底などが出土した。明確ではないが、調査地周辺域で中世後期段階で集落が営まれていた可能性が考えられる。



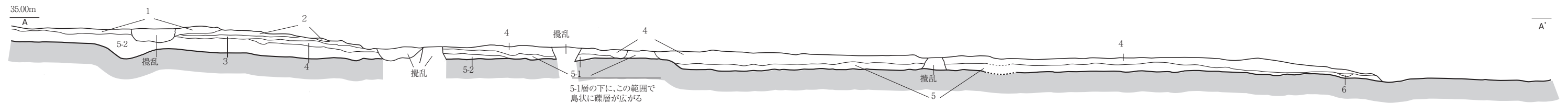
文中写真12 2区重機表土剥ぎ作業風景



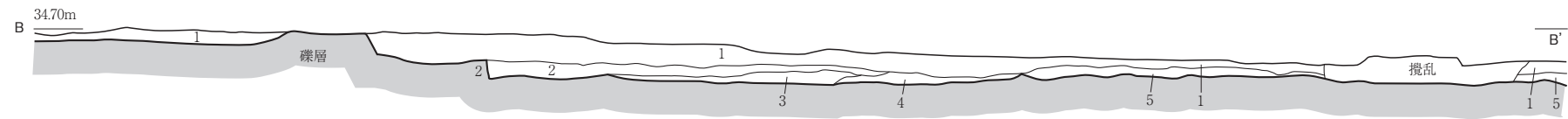
文中写真13 2区作業風景(1)



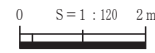
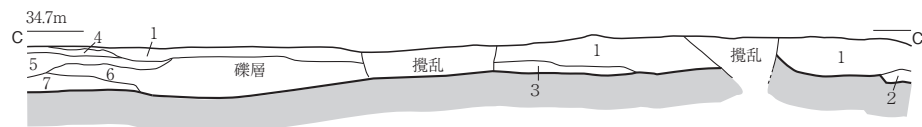
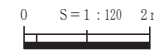
第86図 2区調査後地形測量図



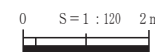
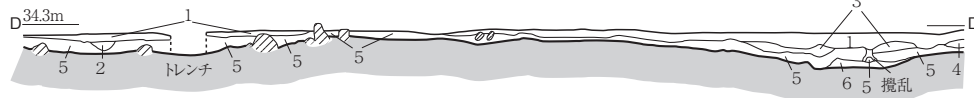
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性・しまり中。径2mm以下の砂粒を少量含む(表土)。
- 2 黒褐色土(2.5Y3/2) 粘性中・しまり中。径2mm以下の砂粒を多く含む(表土)。
- I層 3 オリーブ褐色土(2.5Y4/4) 粘性強・しまり中。径2mm以下の砂粒を多く含む(遺物包含層)。
- II層 4 黒褐色砂質土(10YR2/1) 粘性強・しまり中。径2mm以下の砂粒を多く含む(遺物包含層)。
- 5-1 黒褐色砂質土(10YR1.7/1) 粘性強・しまり中。径2mm以下の砂粒を多く含む。
- 5-2 黒褐色砂質土(10YR3/2) 粘性強・しまり中。径2mm以下の砂粒を多く含む。
- 6 礫層(SD埋土か)。



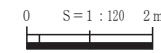
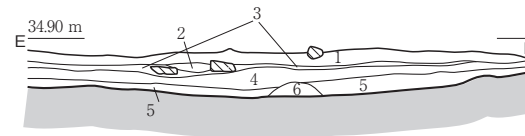
- 1 黒色土(10YR) 粘性・しまり中。径1cm以下の砂礫を少量含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/1) 粘性・しまり中。径1cm以下の砂礫を多量に含む。
- 3 黒色土(10YR1.7/1) 粘性・しまり弱。径2mm以下の砂粒を多く含む。
- 4 黒褐色砂質土(2.5Y3/2) 粘性弱・しまり強。径1cm以下の砂礫を多く含む。
- 5 暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2) 粘性弱・しまり強。径1cm以下の砂礫を多く含む。
- 6 暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2) 粘性弱・しまり強。径5cm～人頭大の礫を多く含む。
- 7 黒褐色砂質土(10YR2/2) 粘性弱・しまり強。



- I層 1 黒色土(10YR) 粘性・しまり中。径1cm以下の砂礫を少量含む。
- II層 2 黒褐色土(10YR3/1) 粘性・しまり中。径1cm以下の砂礫を多量に含む。
- 3 黒色土(10YR1.7/1) 粘性・しまり弱。径2mm以下の砂粒を多く含む。
- 4 黒褐色砂質土(2.5Y3/2) 粘性弱・しまり強。径1cm以下の砂礫を多く含む。
- 5 暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2) 粘性弱・しまり強。径1cm以下の砂礫を多く含む。
- 6 暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2) 粘性弱・しまり強。径5cm～人頭大の礫を多く含む。
- 7 黒褐色砂質土(10YR2/2) 粘性弱・しまり強。



- 1 灰黄色土(5Y4/1) 粘性中・しまり中。径2mm以下の砂粒を少量含む。東側にいくほど粘性が高くなり5mm～3cmほどの中礫が混じる。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性強・しまり強。径5mm～10mm砂礫を少量含む。
- 3 黒褐色土(2.5Y3/1) 粘性強・しまり中。径2mm以下の砂を少量含む。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性中・しまり中。径2mm～10mmの砂礫を少量含む。
- 5 黒色砂質土(7.5YR4/2) 粘性中・しまり中。径2mm以下の砂粒を多量に含む。
- 6 黒色砂質土(10YR1.7/1) 粘性強・しまり中。径2mm以下の砂を含む。
- 7 灰オリーブ砂質土(7.5Y6/2) 粘性弱・しまり弱。径1mm程度の砂粒を多量に含む(地山)。



- I層 1 黒褐色土(10YR 2/2) 粘性・しまり強。径2mm以下の砂粒を多く含む。
- 2 暗褐色土(10YR 3/3) 粘性・しまり弱。径2mm以下の砂粒を多く含む。
- 3 黒褐色砂礫(10YR 3/2) 粘性・しまり弱。径3mm以上の砂礫、10mm～30mmの細礫を多く含む。
- II層 4 灰色砂質土(7.5Y 4/1) 粘性・しまり強。径1mm以下の砂粒により形成された層。
- 5 黒色砂質土(10YR 1.7/1) 粘性・しまり中。径2mm以下の砂粒を多く含む。
- 6 黒色砂質土(10YR1.7/1) 粘性・しまり中。径10cm～15cmの礫を含む。

第87図 2区基本層序

## 第2節 2区の基本層序 (第87図)

この地区では、表土・造成土以下で縄文時代から中世にかけての遺物を包含する層を2枚(2-I層・2-II層)検出し、この時期に該当する遺構も検出した。

2-I層は、表土・造成土直下であり、ほぼ調査区の全面に亘って検出された。縄文時代から中近世にかけての遺物が多量に包含されており、固く締まっていた。

2-I-II層は、2-I層の直下であり、4層に細分できる。

包含層以下は、河川堆積層と考えられる大振りの巨礫を含む、自然堆積した無遺物層である砂礫層(2-III層)が基盤となっている。なお、調査区東側では、2-III上で自然河川の痕跡を検出した。埋土中において遺物がまったく出土しなかったこと、基盤層が無遺物の2-III層となることから、縄文時代以前のものと考えられる。

また、珪藻、花粉、植物珪酸体を対象とした埋土の自然科学分析を行い、その結果、堆積環境は1-II層堆積以前、流路となっていた箇所(流路1・2)では、流水性の珪藻化石が高率で産出したことから、定常的に流れのある水域(流路)であったことが推定され、1-II層堆積時には、水が停滞した後背湿地様の環境であったと推定されている。また、2-II-4層中からは花粉化石がほとんど検出されなかったが、2-II-3層中では、木本類ではマツ属が最も多く産出し、草本花粉ではクマザサ属をはじめヨシ属、ススキ属などの生育が窺われる。また、2-II-3層には、イネ属型花粉が多く含まれており、この層には稲粃、稲藁、もしくは水田耕作土が流入したと考えられている。

後述するように、2-I層・2-II層とも近世に形成された層と考えられ、この時期には水田耕作を中心とした耕作地になっていたものと推察される。

## 第3節 縄文時代の調査成果

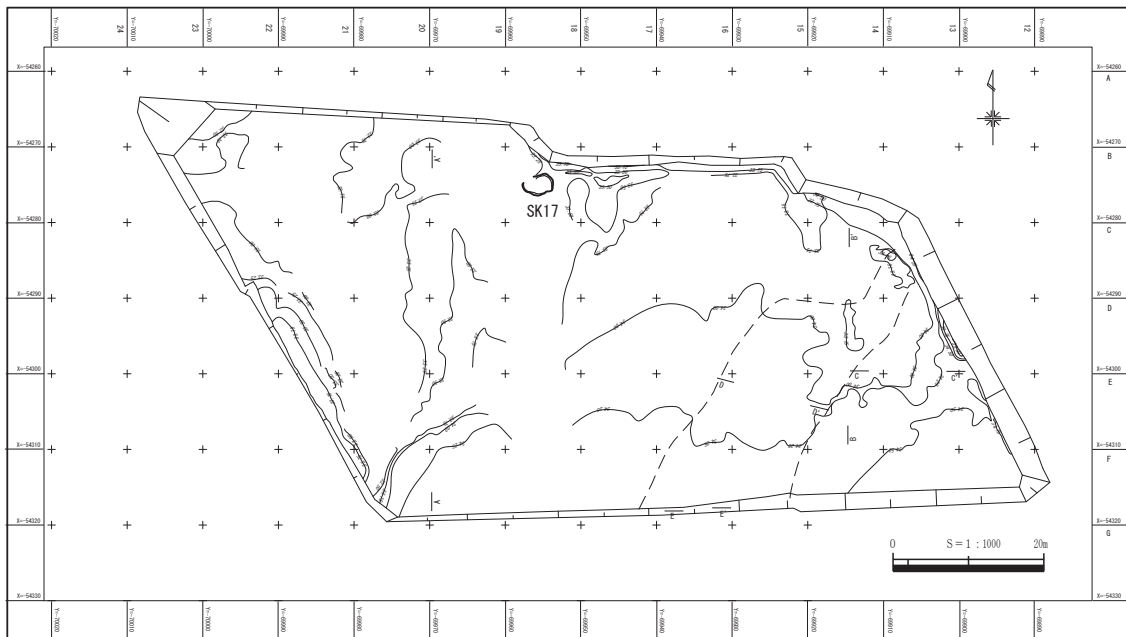
### 1 概要 (第88図)

縄文時代では、明確な遺構はわずかに晩期前半ごろの土坑を1基(SK17)検出したに過ぎないが、自然河川埋土中や遺物包含層等では、早期から晩期にかけての遺物が多量に出土している。

主な出土遺物は、晩期のものが中心となっていることから、この時期において調査区近辺では、集落が形成されていた可能性が高いと思われる。

1区で検出されたような、縄文時代後期初頭の集落関連の遺構については、この地区では検出されなかったが、当該期の土器も一定量出土していることから、調査時では失われていたが、関連する遺構が存在していた可能性がある。

また、1区に比べて狩猟具である石鏃の他、開墾具と考えられる打製石鋤などの石器の出土量が多いのが特徴である。



第88図 2区縄文時代遺構配置図

## 2 土坑

### SK17 (第89～92図、PL.64・69～71・98)

調査区中央北側のB18グリッドにあり、標高33.4mのほぼ平坦面に立地する。造成土を掘り下げた後の2～Ⅲ層で検出した。中央は自然流路1・3によって掘り込まれている。

平面は、不整な長楕円形を呈すものと考えられ、長軸4.07m、短軸2.5mを測る。断面は一部二段掘り状を呈し、深さは最大0.22mを測る。非常に不明瞭な掘り込みで、底面は凹凸が見られる。

埋土は、大きく3層に分層できた。いずれも黒褐色土系の埋土である。

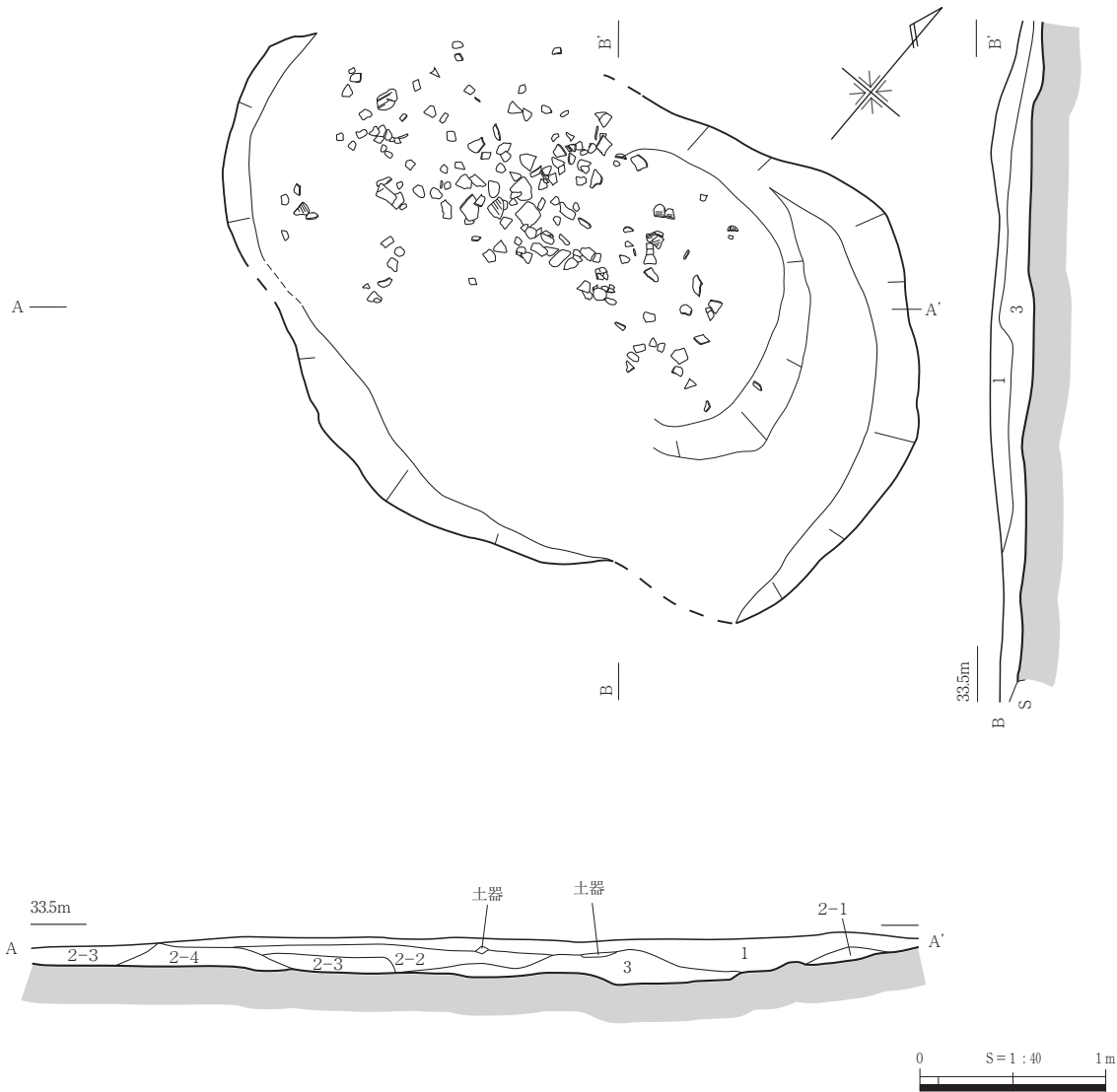
埋土上層を中心に、多数の縄文土器片が出土した。図化したものは、深鉢379・382～386・388～399、浅鉢380・381・387・400である。出土した深鉢は、体部から頸部が外反するもの(A類)、口縁部が直立し砲弾形を呈すもの(B類)、体部から口縁部にかけて緩やかに内湾するもの(C類)の大きく3タイプに分類できる。A類には口縁端部に刻み目が入るものと入らないものがあり、383は頸部に半裁竹管状工具による連続刺突文・貼り付け突帯を施すものである。

その他石器類もわずかではあるが出土しており、図化したものには、大型の黒曜石製凹基無茎石鏃S135、小型のサヌカイト製凹基無茎石鏃S136、大型のサヌカイト製平基無茎石鏃S137、サヌカイト製調整体S138、小型の打製石鏃S139がある。いずれも埋土中からの出土である。

出土遺物から、濱田編年晩期Ⅲ期、縄文時代晩期前半ごろの、土器廃棄土坑と考えられる。

また、1～3層中で出土した炭化材・炭質物について放射性炭素年代測定を行ったところ、1層出土の炭質物が $2,920 \pm 30$ yBP、2層出土の炭質物が $2,770 \pm 30$ yBP、3層出土の炭化材が $7,880 \pm 30$ yBPの数値を得た。1・2層出土の炭質物は縄文時代晩期前半ごろの年代と考えられ、土器の編年観と一致するが、3層出土の炭化材については、他の試料の測定結果や土器の編年観と大きく乖離しており、古い時期の炭化材の混入と考えられる。





- 1 黒色土(7.5YR2/1)粘性中・しまり強、径3mm～5mmの礫を多く含む。
- 2-1 黒褐色土(10YR3/2)粘性中・しまり強、径3mm～5mmの礫を多く含む。
- 2-2 黒褐色土(7.5YR3/1)粘性中・しまり弱、径3mm～5mmの礫を少量含む(2-3層と比較してきめが細かい)。
- 2-3 黒褐色土(7.5YR3/1)粘性弱・しまり弱、径3mm程度の礫を少量含む(2-2層と比較してきめが粗い)。
- 2-4 灰黄褐色土(10YR4/2)粘性弱・しまり弱、(2-3層以上にきめが粗い)。
- 3 黒色土(7.5YR1.7/1)粘性強・しまり強、径5mm～10mmの礫を多く含む。

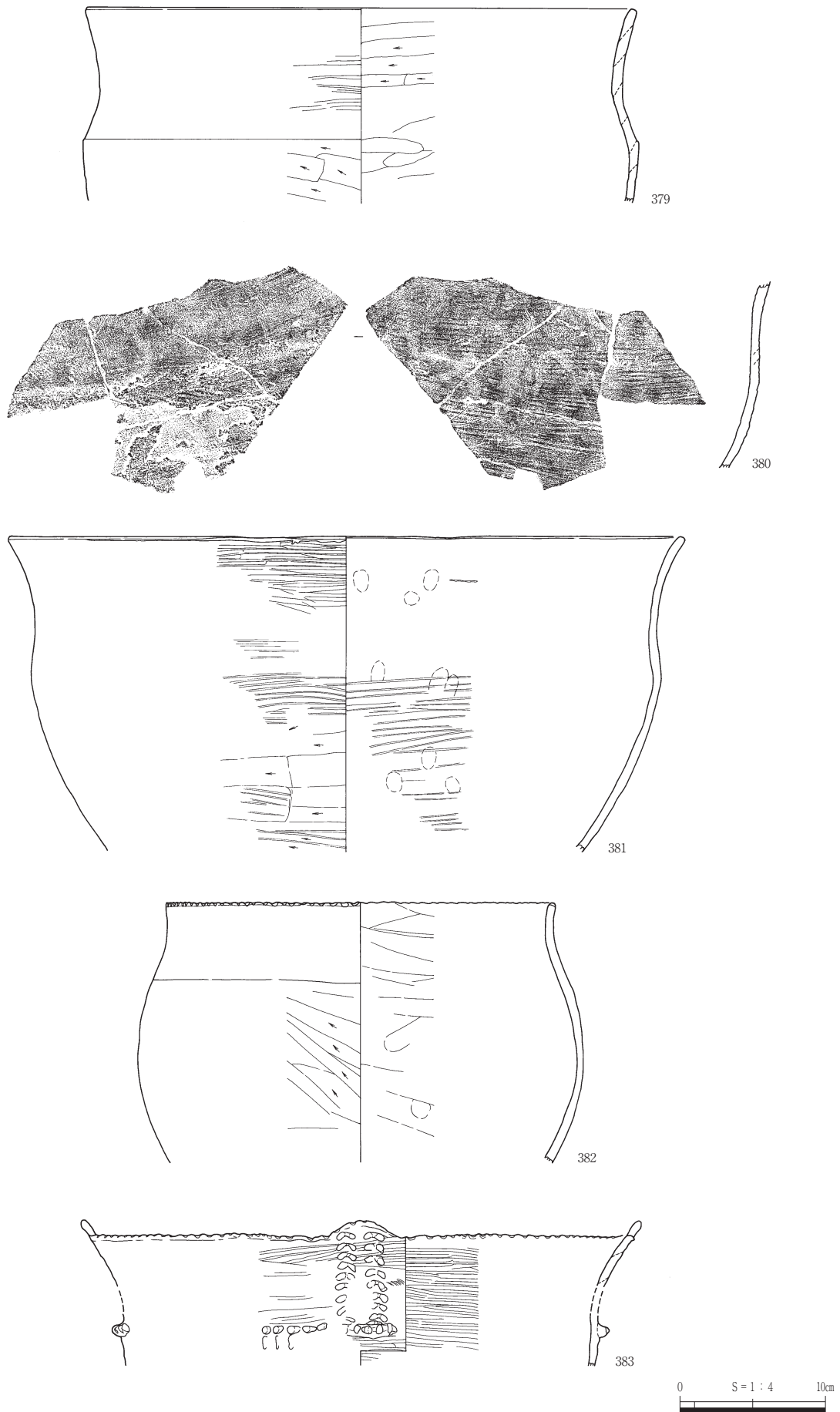
第89図 SK17



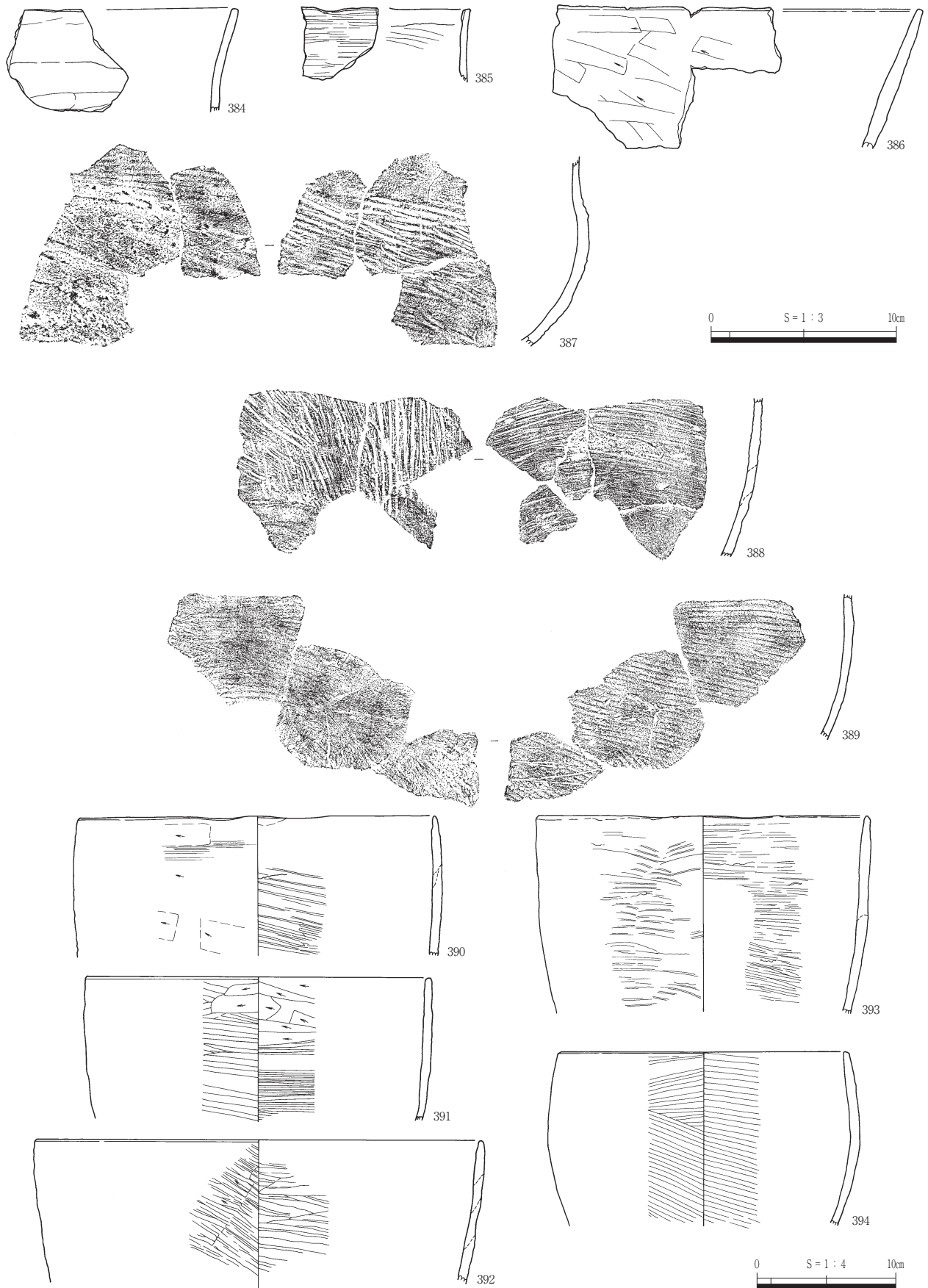
文中写真14 平成24年度現地説明会風景(1)



文中写真15 平成24年度現地説明会風景(2)

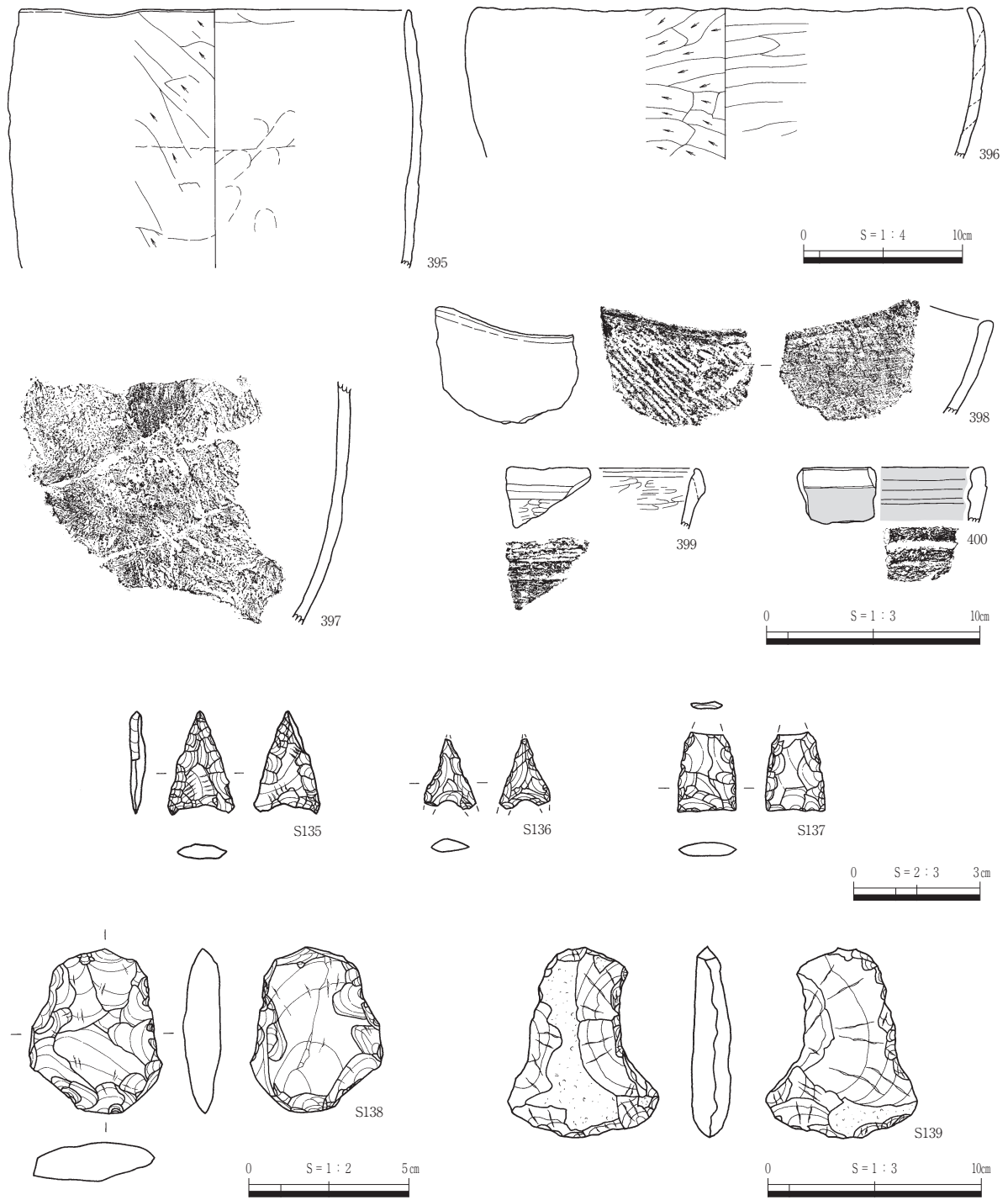


第90図 SK17出土遺物(1)



第91図 SK17出土遺物(2)





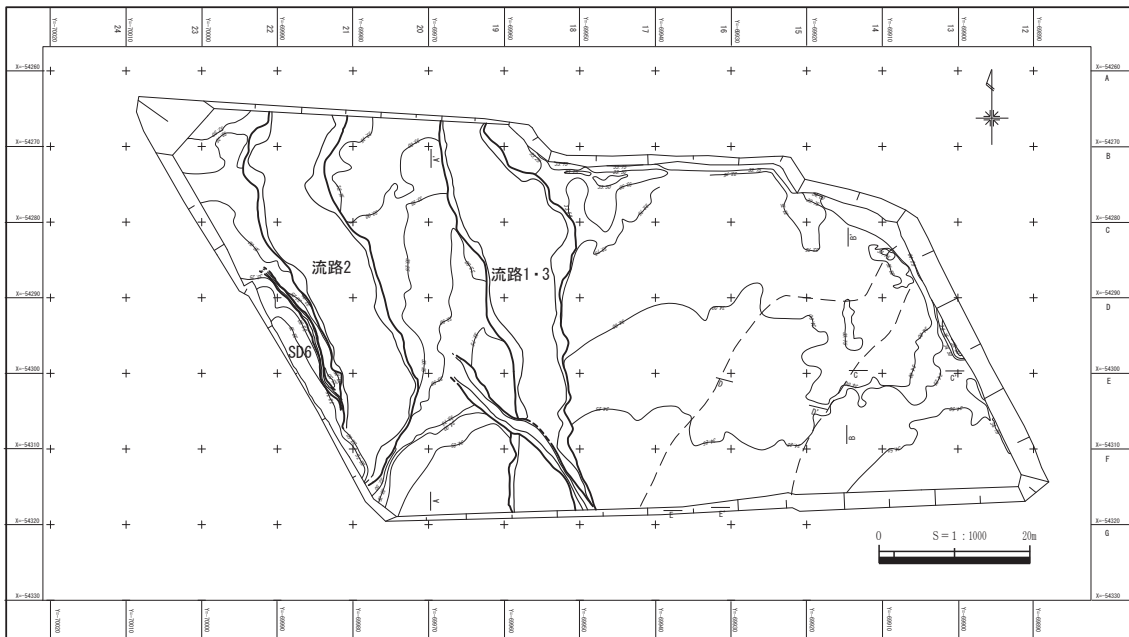
第92図 SK17出土遺物(3)

## 第4節 古墳時代から古代の調査成果

### 1 概要 (第93図)

古墳時代から古代では、溝1基 (SD 6)、自然流路 (流路1～3) 3基を検出した。

自然流路は縄文時代から古墳時代まで機能していたと思われるが、埋没したのは古墳時代と考えられる。この時期も、圃場整備工事の影響で、わずかな遺構の検出にとどまった。



第93図 2区古墳時代から古代遺構配置図

### 2 溝

#### SD 6 (第94・95図、PL.65・75)

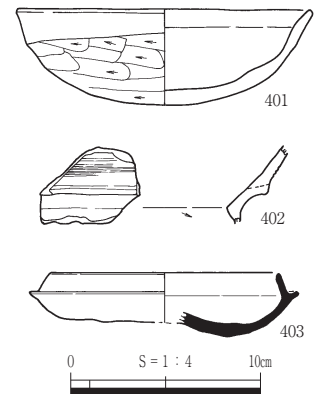
調査区西側のC 21・22、D 21、E 21 グリッドにあり、標高33.3～33.7 m付近のほぼ平坦面に立地する。南側・北側は削平され遺存していない。断面を観察すると、東側の流路2を掘り込むように作られていることが判明した。

長さ15 m以上、幅0.48～1.34 m、深さ最大0.49 m程度を測る。底面の標高は、南側が33.4 m、北側が33.2 mとなり、ほぼ南北方向に走り、南から北に向かって流れていたものと考えられる。

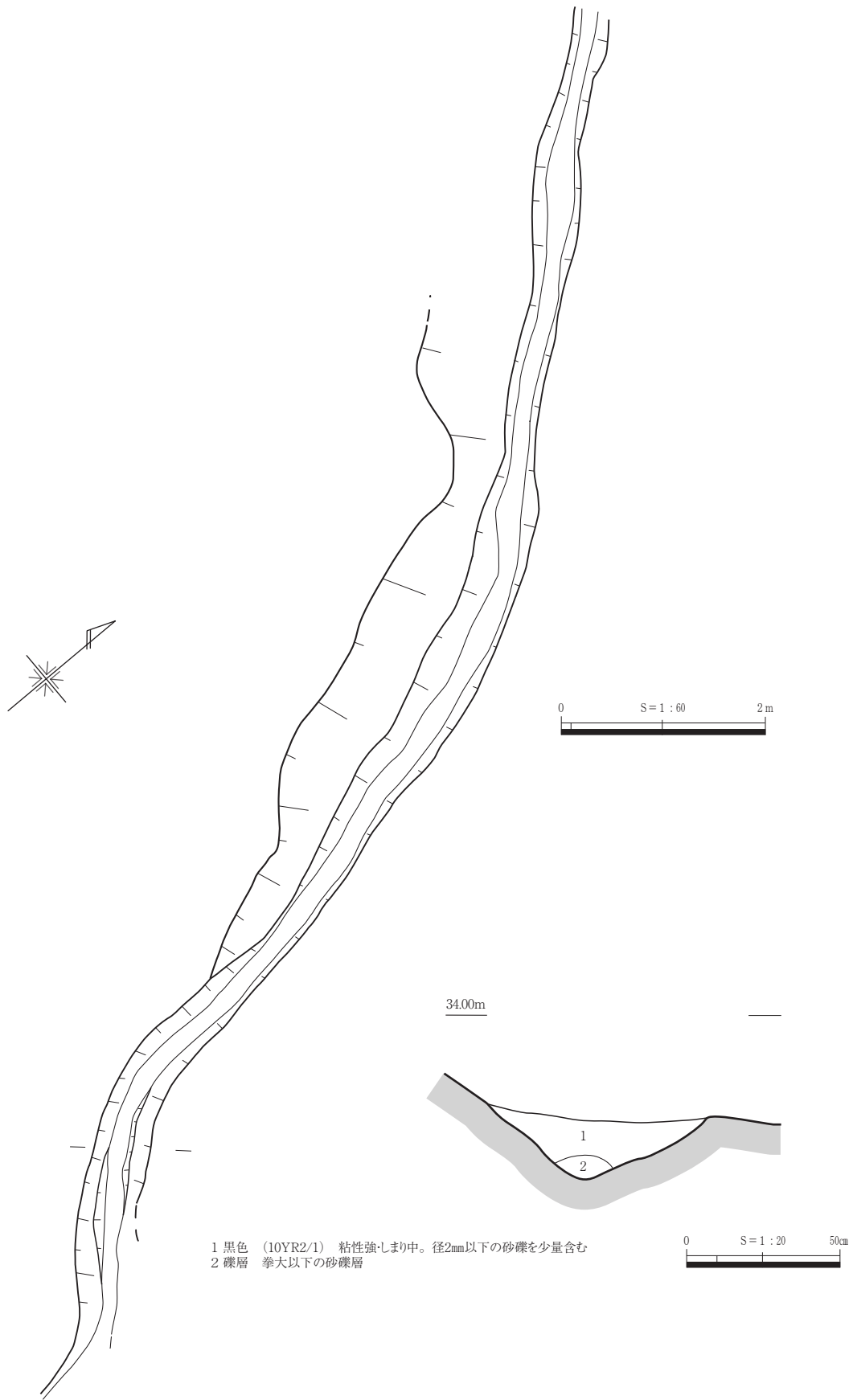
埋土は、概ね2層に分層できた。上層は黒色土、底面付近は拳大の礫を含む砂礫層が堆積している。埋土の状況から、ある程度の水流があったものと考えられる。

出土遺物は、埋土中から土器片が出土したが、そのうち図化したものは土師器鉢401、弥生土器鼓形器台402、須恵器坏身403である。

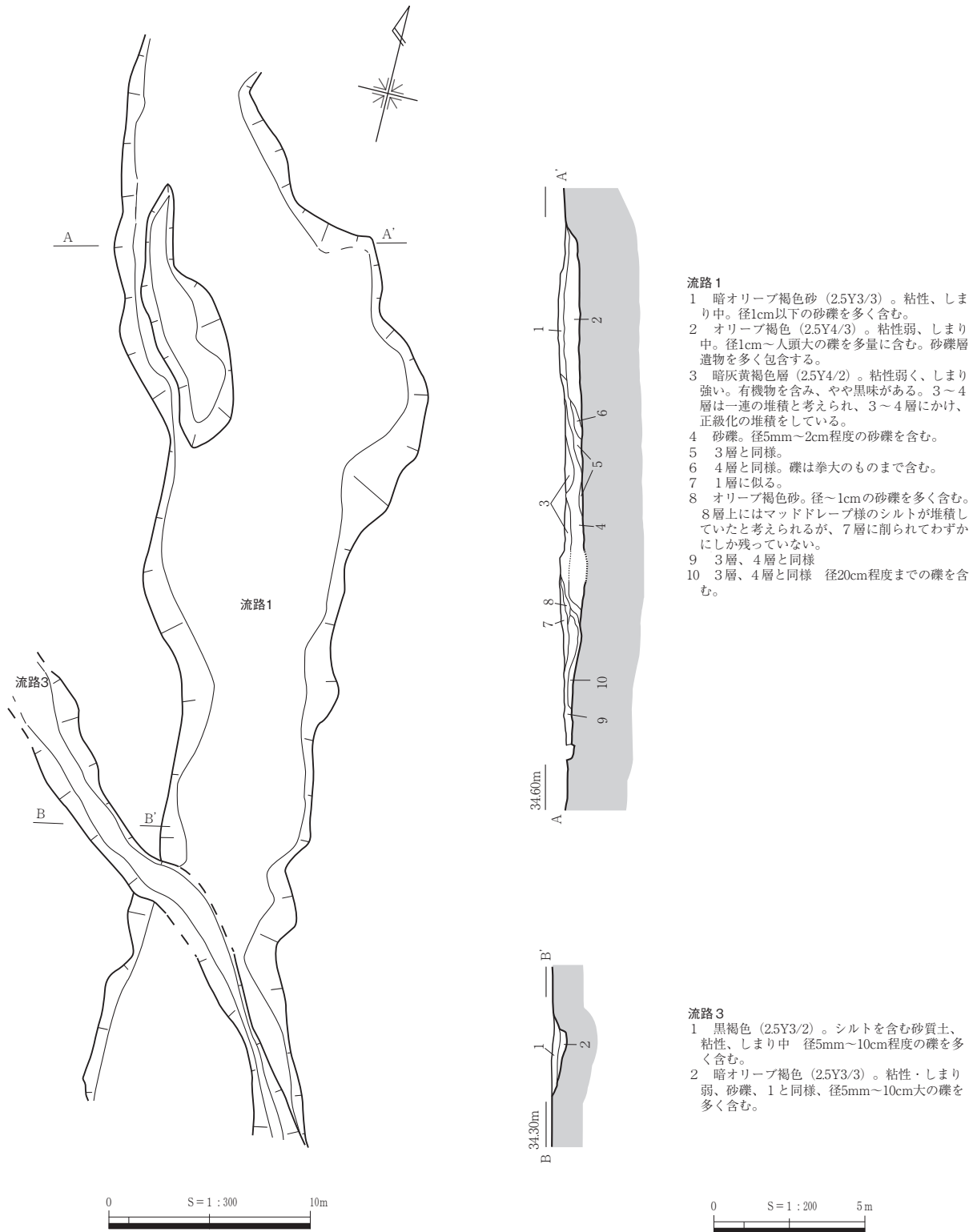
出土遺物のうち、401は天神川I期、古墳時代前期初頭ごろ、402は清水編年V-3様式、弥生時代後期後葉ごろのもので、混入と考えられる。403は埋没時期を示すものと考えられ、TK209併行期であることから、古墳時代終末期に埋没したものと考えられる。



第94図 SD6出土遺物



第95図 SD6



第96図 流路1・3

### 3 自然流路

流路1・3 (第96～108図、PL.65・71～76・94・96・97・99)

調査区中央やや西側のA 19、B 18・19、C 18・19、D 18・19、E 18・19、F 18・19グリッドにあり、標高33.2～34.6m付近の北西方向へ傾斜する緩斜面地に立地する。流路1は調査区を横断し、



第97図 流路1 出土遺物(1)

流路3は流路1の南側を斜交するように流れる。切り合い関係から、流路1の埋土を流路3が切り込んでいることを確認した。

流路1は、長さ50 m以上、幅約6～15 m、深さ0.2～0.3 m程度を測る。底面の標高は、南壁付近が34.2 m、北壁付近が32.9 mを測り、後述する流路2に平行するように南から北に向かって流れていたものと考えられる。



埋土は、10層程度に分層できた。上層は砂質土、下層は砂礫層となる。埋土の状況から、ある程度の水量があったものと考えられる。

遺物は、埋土中から縄文時代早期の土器から古墳時代後期の土師器まで多量に出土した。

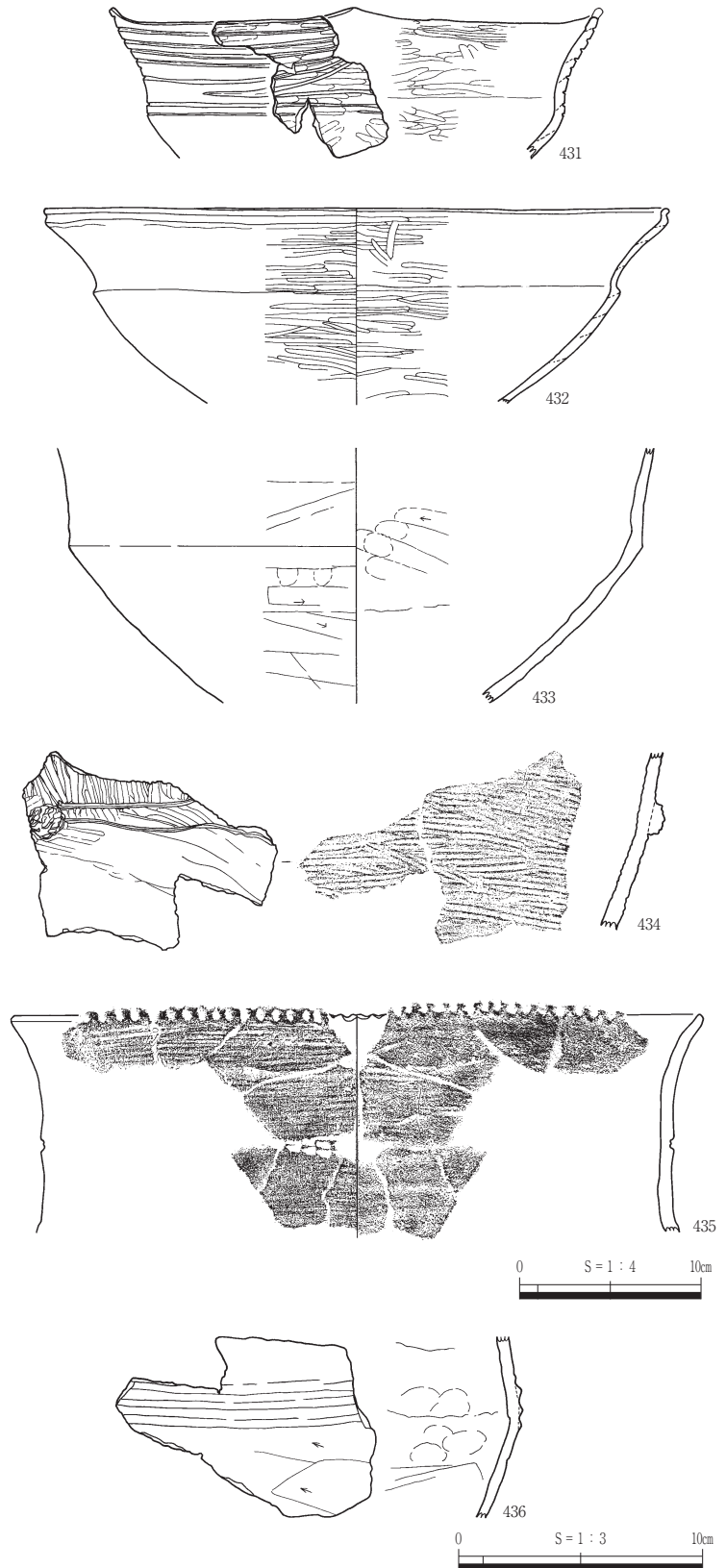
図化したものは、縄文時代早期では、縄文時代早期神宮寺式のネガティブ楕円押型文をもつ鉢404、黄鳥式と考えられる乱れた楕円押型文をもつ深鉢405がある。

縄文時代中期のものでは、波子式と考えられる、口縁部が肥厚し縄文が施される深鉢406がある。

縄文時代後期のものでは、2条沈線に磨消縄文が施される五明田式併行期（中津・福田KⅡ式土器様式第3様式古段階）の深鉢407～409、鳥式併行期（中津・福田KⅡ式土器様式第3様式新段階）の深鉢410～415、布勢式併行期（中津・福田KⅡ式土器様式第4様式）の深鉢416～420、崎ヶ鼻1式併行期（縁帯文土器様式第1様式）の深鉢421～424、鉢425、宮滝式併行期（凹線文土器様式）の浅鉢426～430がある。

縄文時代晩期のものでは、濱田編年晩期Ⅰ期の浅鉢431、濱田編年晩期Ⅲ期の浅鉢432・433・437～446、深鉢434～436・447～452、突帯文土器様式深鉢453～485、粗製土器486～489・491～496、浅鉢490、底部497～501である。

弥生時代のものでは、弥生時代前期、清水編年Ⅰ-2様式の甕502～506、弥生時代中期、清水編年Ⅲ-1様式の壺507、弥生時代中期後葉、清水編年Ⅳ-2・3様式の甕508～512、清水編年Ⅲ-2様式の高坏513、弥生時代中期の底部514・515、弥生時代後期の清水編年Ⅴ-1様式と考えられる壺516がある。



第98図 流路1出土遺物(2)

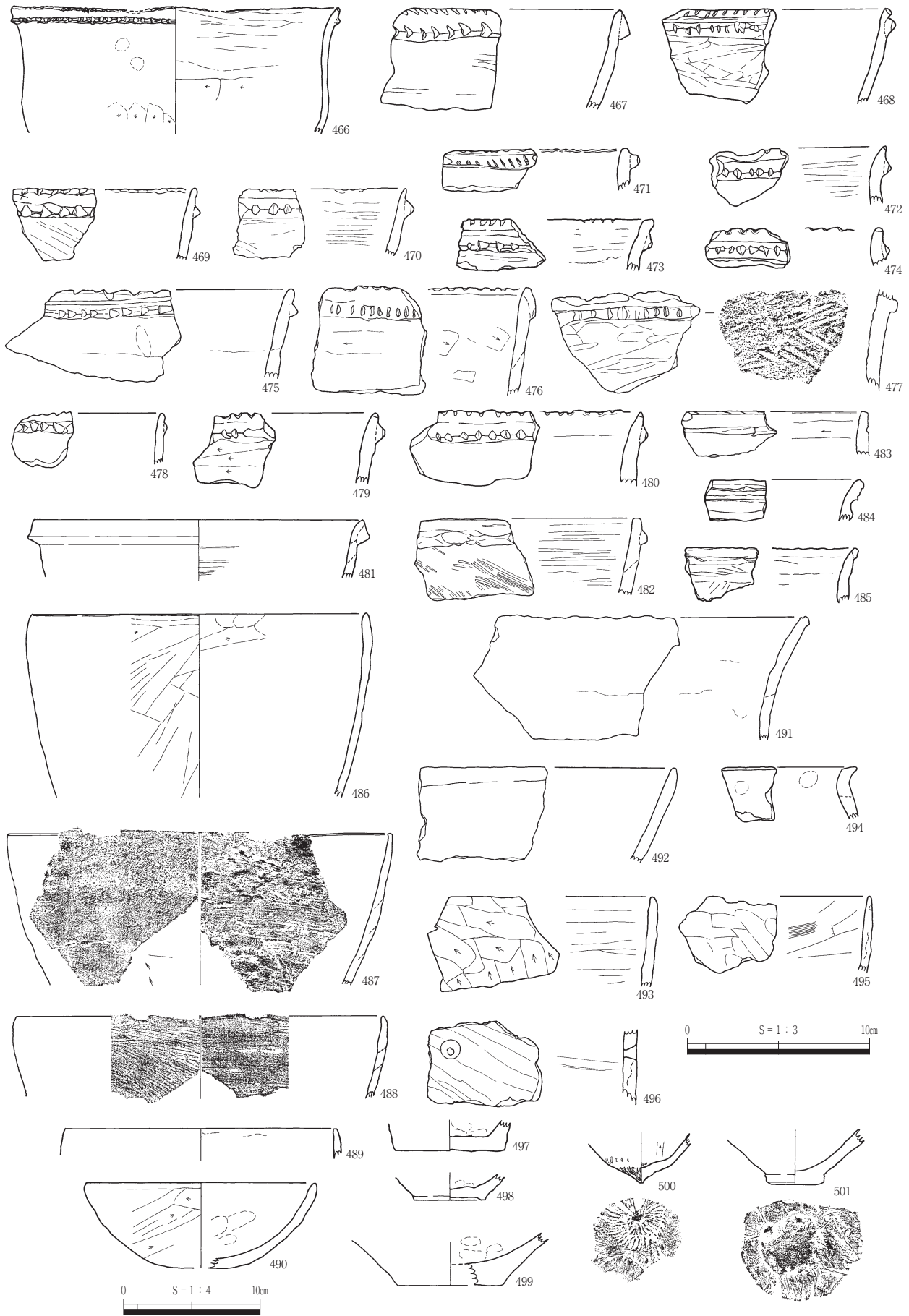


第99図 流路1 出土遺物(3)

古墳時代のものでは、古墳時代前期の天神川Ⅰ～Ⅱ期の甕517、壺518、高坏519がある。

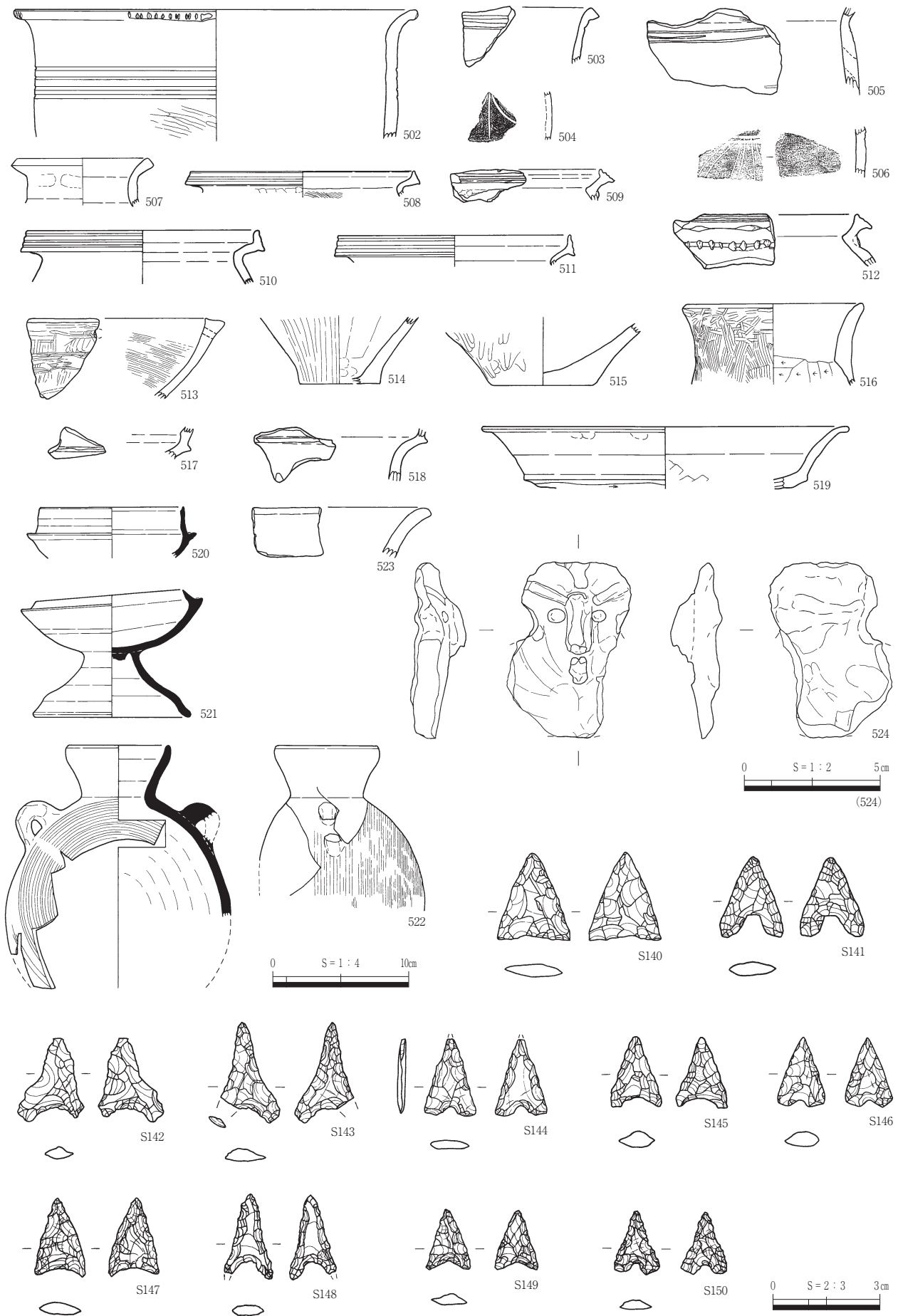
また、古墳時代中期末のTK47 併行の須恵器坏身520、古墳時代後期末のTK209 併行の須恵器有蓋高坏521、提瓶522、土師器甕片523がある。

その他、2層中で人面土製品524が出土している。欠損はしているが、分銅形の平面形を呈し、表面には目・眉・鼻・口の表現が施されている。目は径3～4mmの棒状の刺突具で円形に表現され、



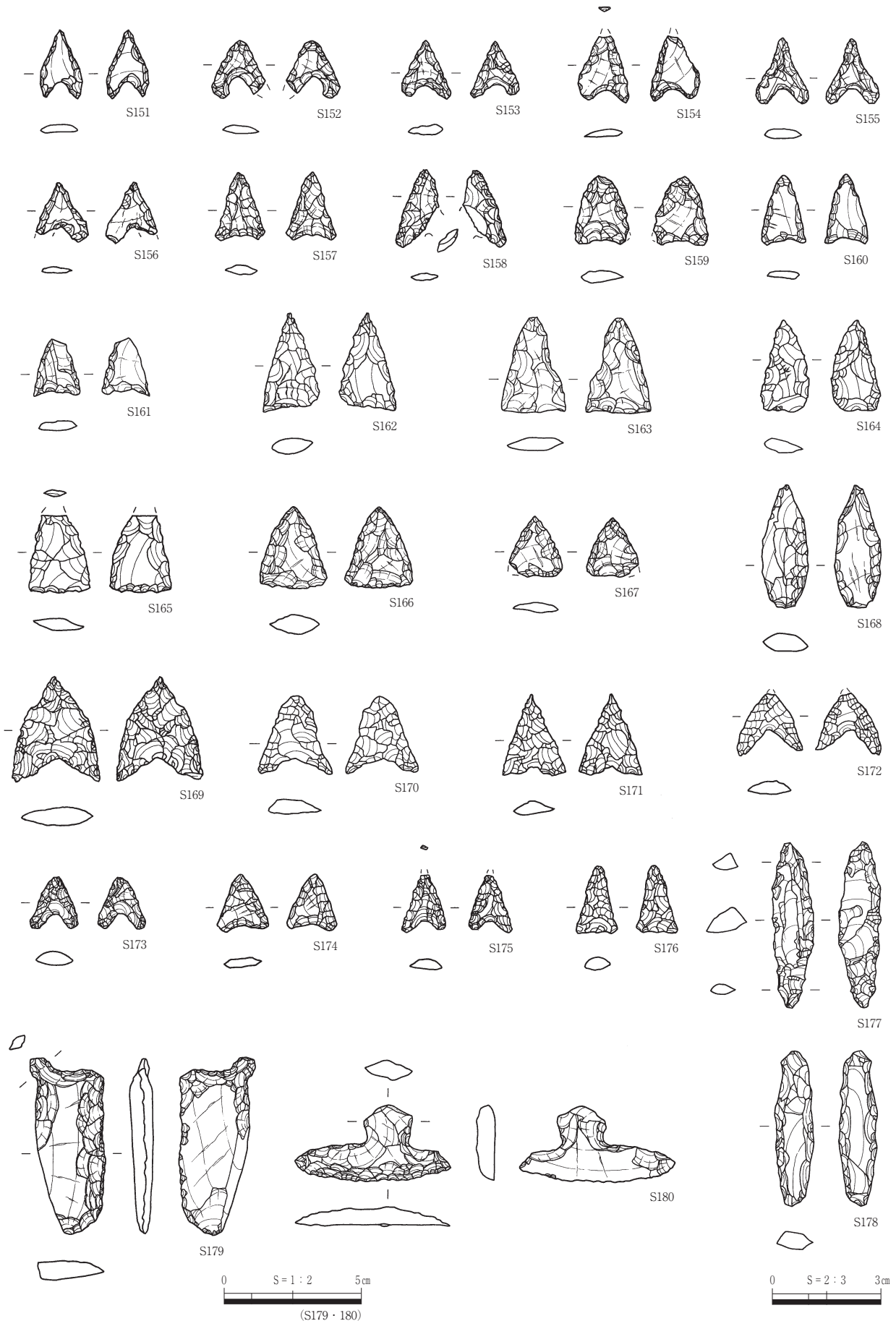
(481・486~490・497~501)

第100図 流路1出土遺物(4)



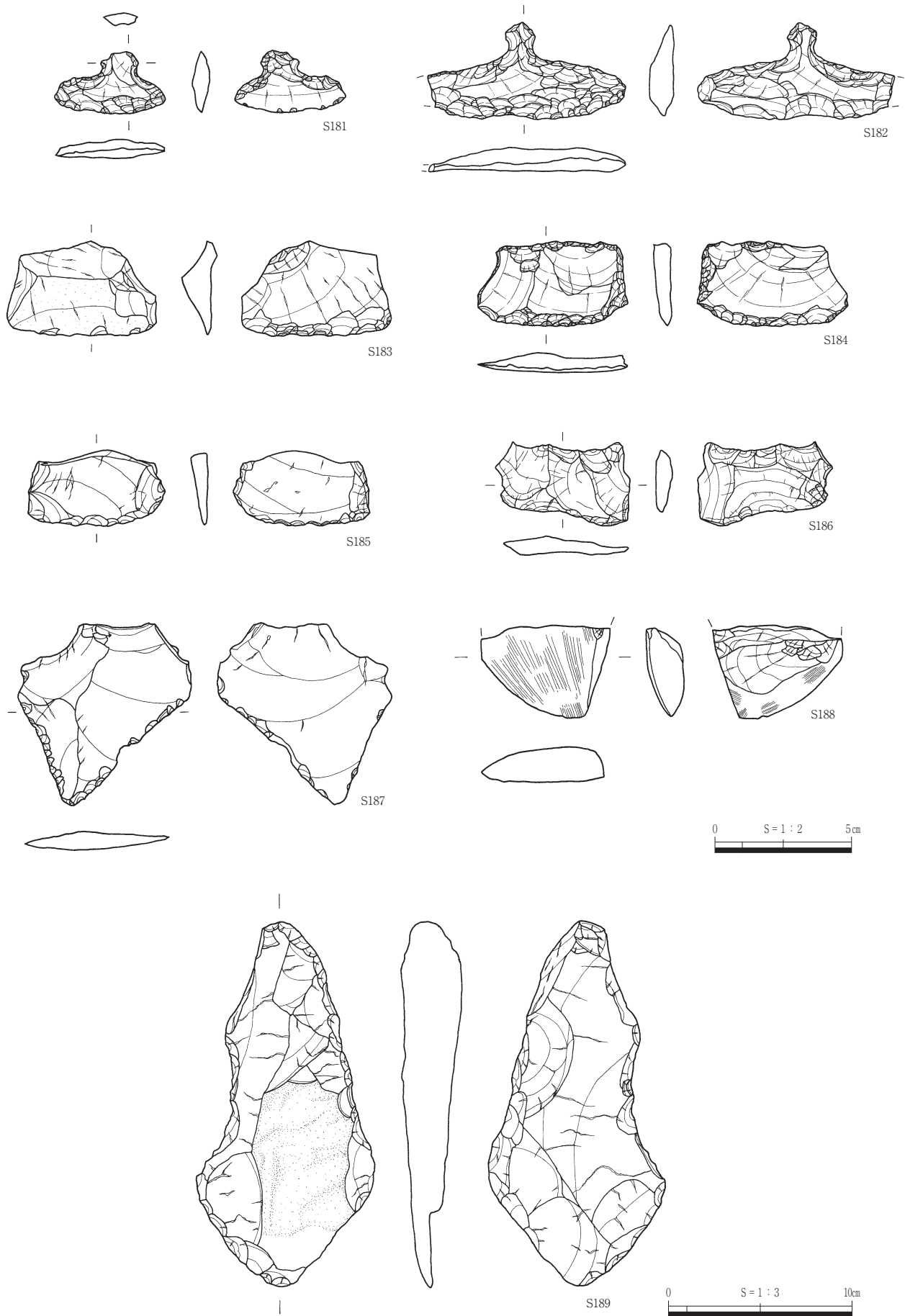
第101図 流路1 出土遺物(5)



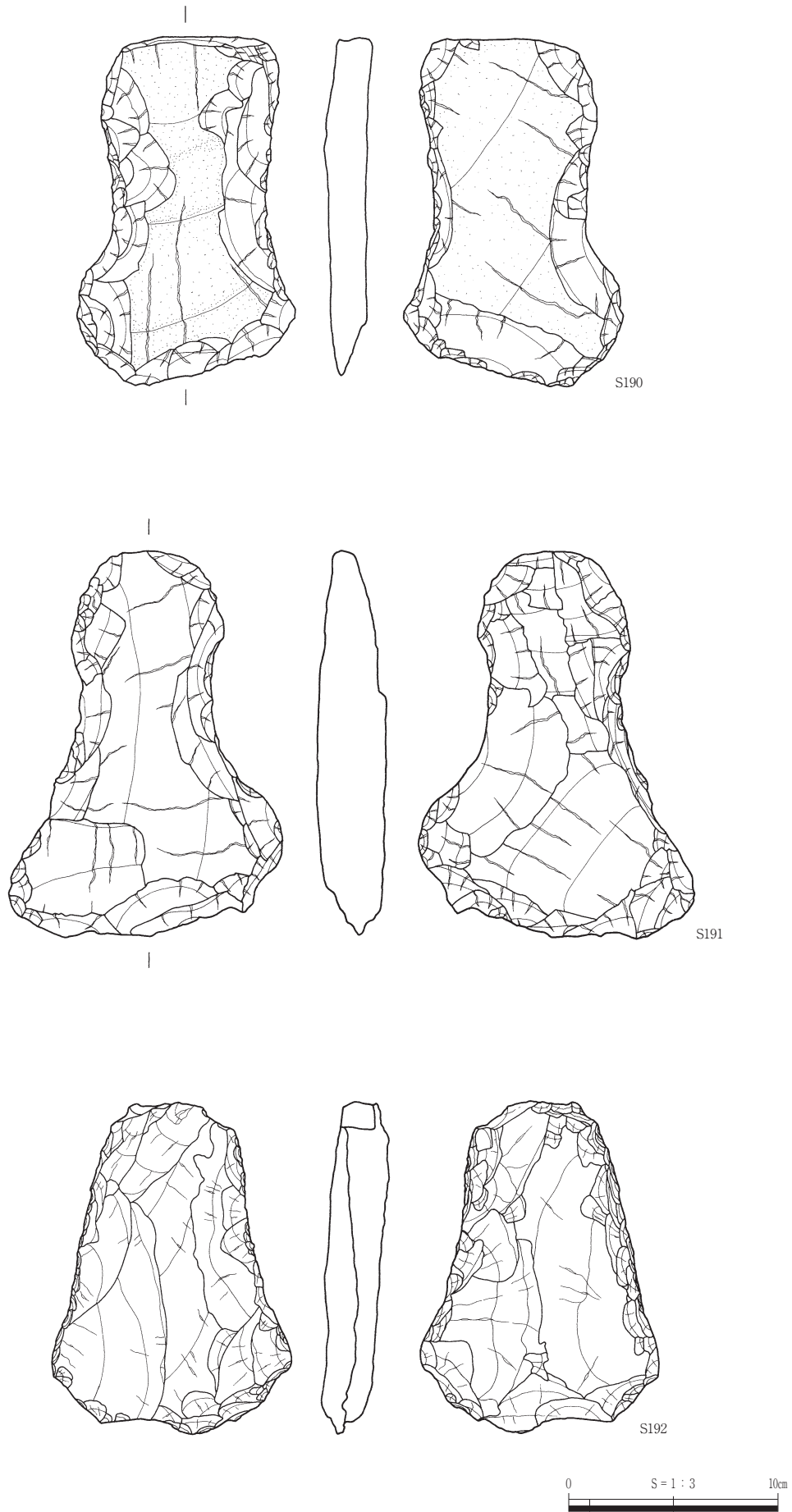


第102図 流路1出土遺物(6)

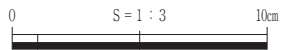
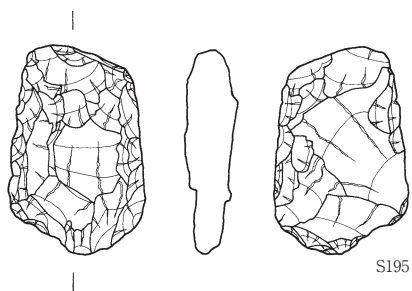
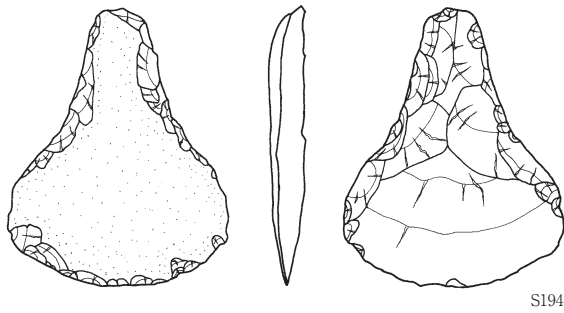
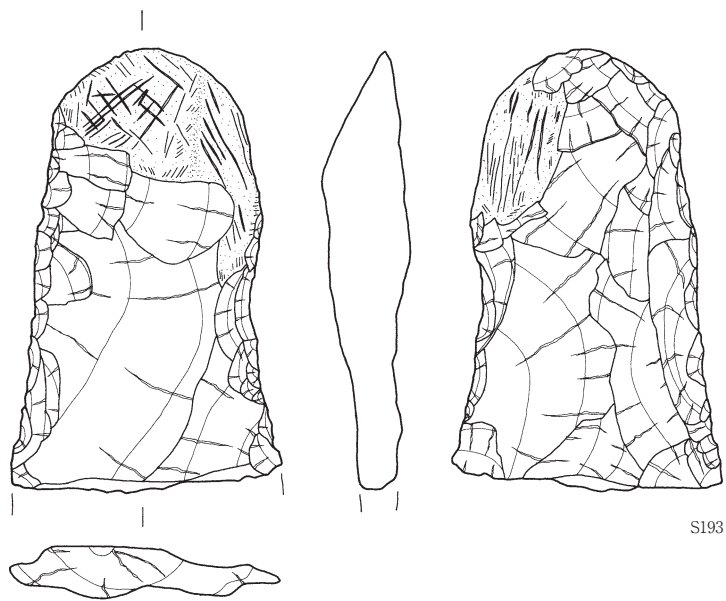




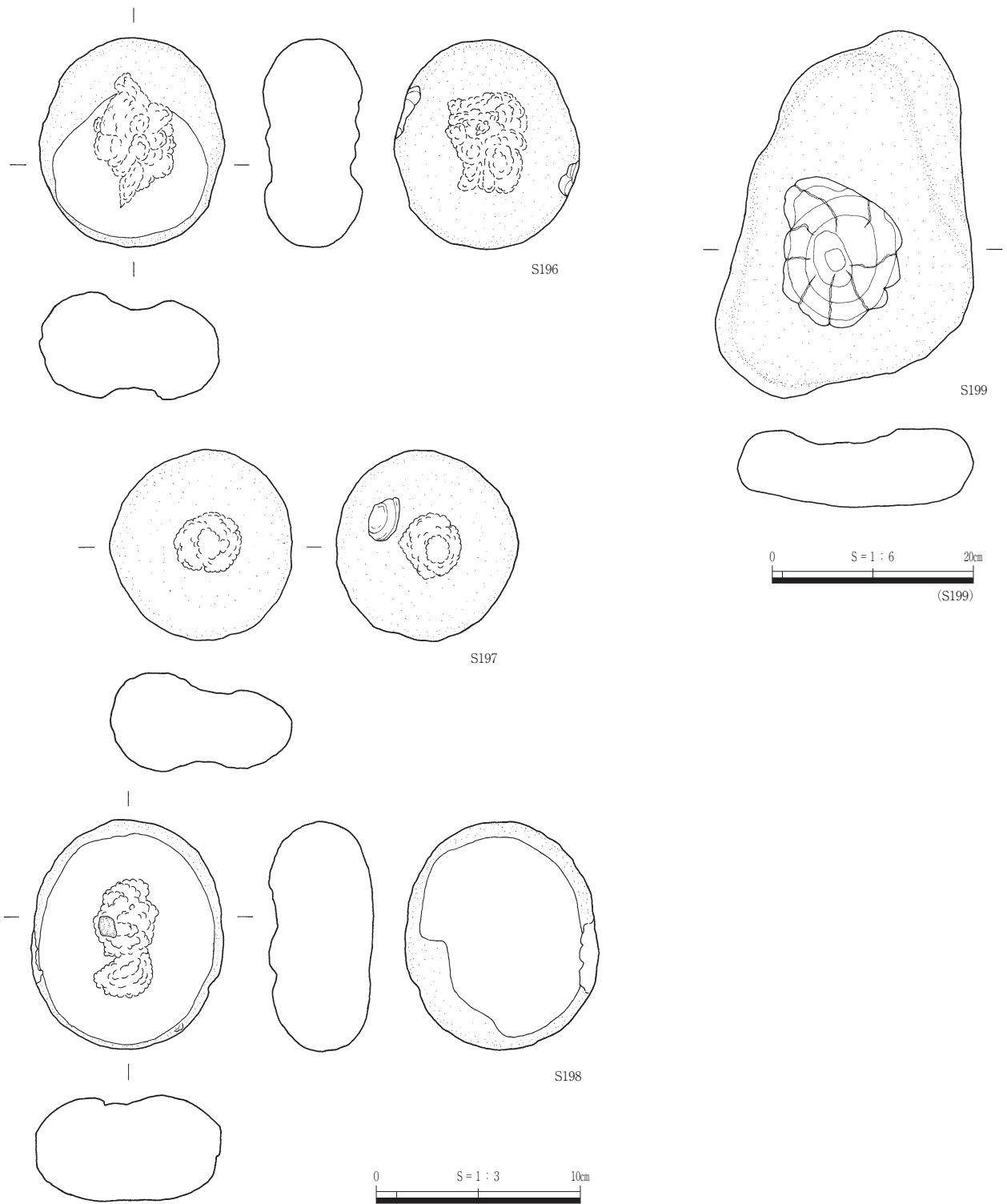
第103図 流路1 出土遺物(7)



第104図 流路1出土遺物(8)



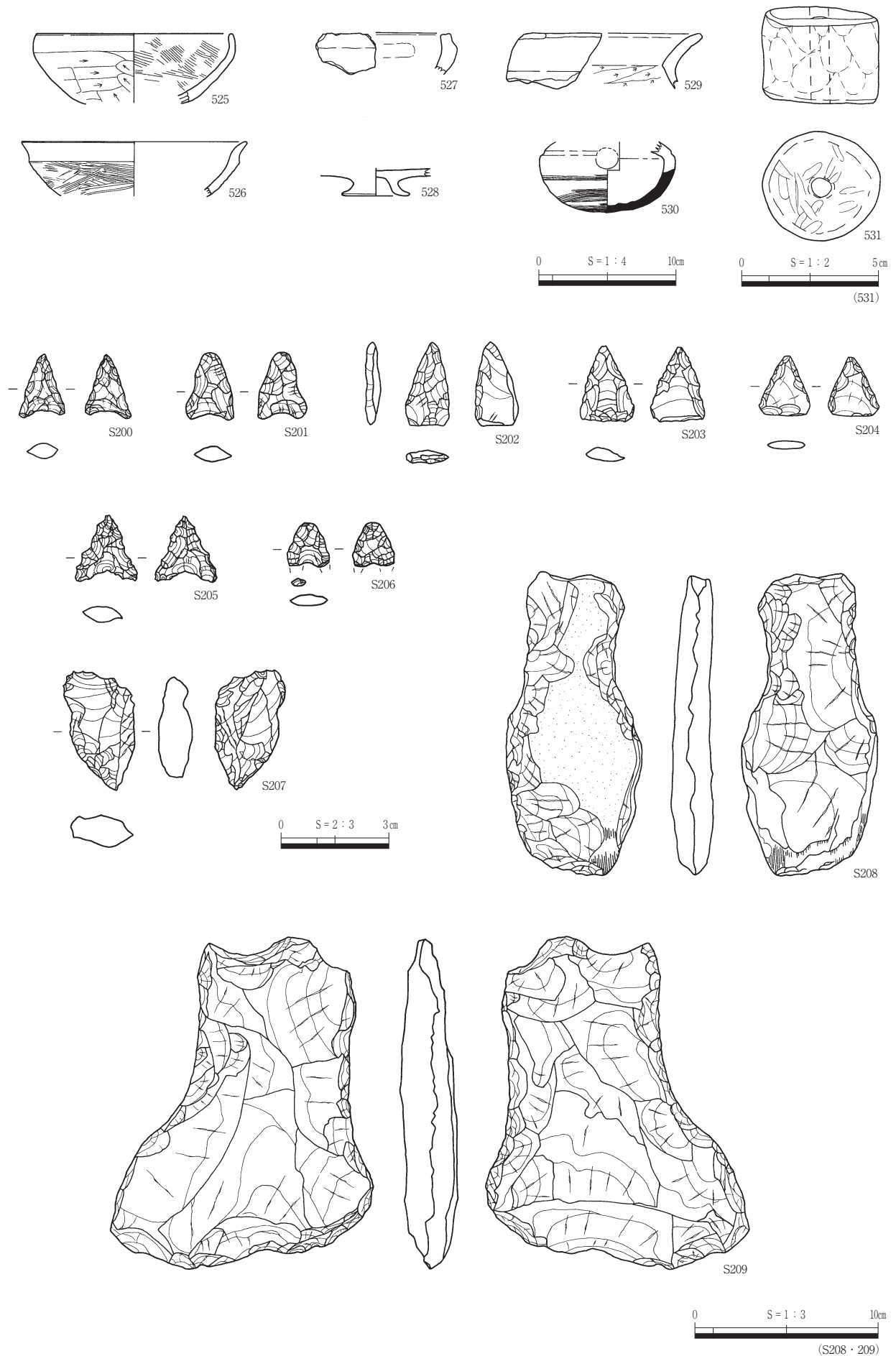
第105図 流路1 出土遺物(9)



第106図 流路1 出土遺物(10)

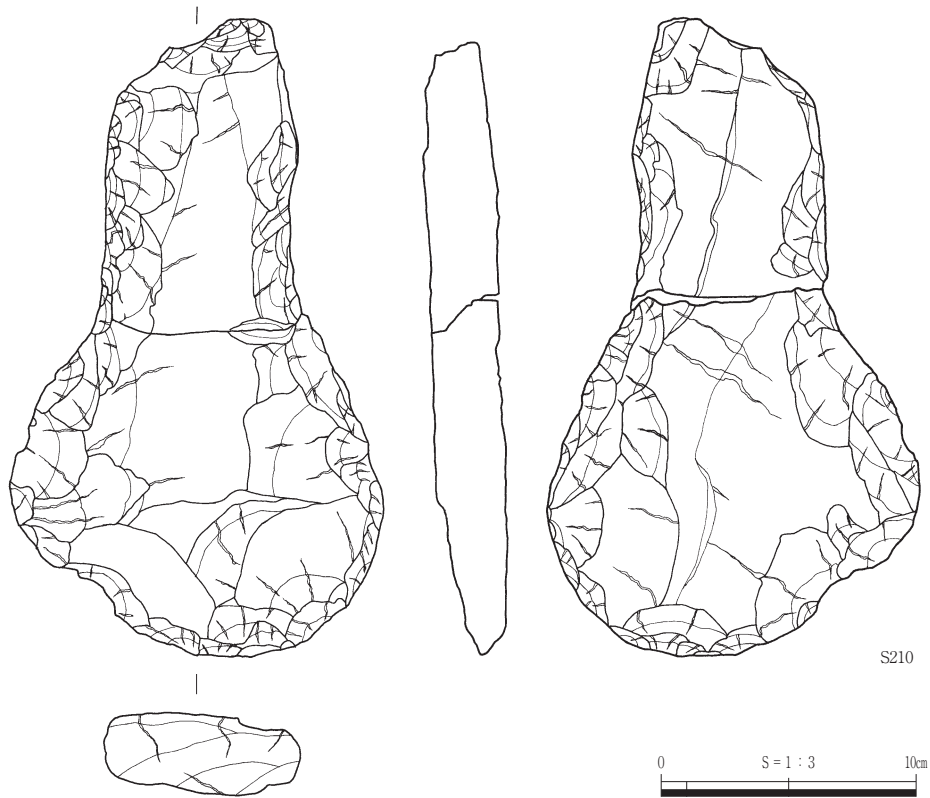
鼻は粘土紐を貼り付け、先端には鼻孔の表現もされる。眉は、工具による強いナデで表現される。口は、歪な長方形に掘り込まれ、上部には2箇所刺突があり、口唇か歯の表現と考えられる。裏面は剥離しているものと思われ、元々は土器などに貼り付けたものと思われる。帰属時期は不明である。

その他石器類が多量に出土しており、図化したものには、サヌカイト製凹基無茎石鏃 S 140～S 161、サヌカイト製平基無茎石鏃 S 162～S 167、サヌカイト製木の葉形有茎石鏃 S 168、黒曜石製



第107図 流路3出土遺物(1)





第108図 流路3出土遺物(2)

凹基無茎石鏃 S 169～S 175、黒曜石製平基無茎石鏃 S 176、黒曜石製石錐 S 177、サヌカイト製両面調整体 S 178、サヌカイト製縦型石匙 S 179、サヌカイト製横型石匙 S 180～S 182、サヌカイト製削器 S 183～S 185、サヌカイト製楔形石器 S 186、サヌカイトの二次加工のある剥片 S 187、磨製石斧片 S 188、硬質安山岩製打製石鏃 S 189～S 195、角閃石製又はデイサイト製凹石 S 196～S 198、大型の石皿 S 199 がある。これら石器の帰属時期は不明であるが、ほぼすべて縄文時代に帰属するものと考えられる。

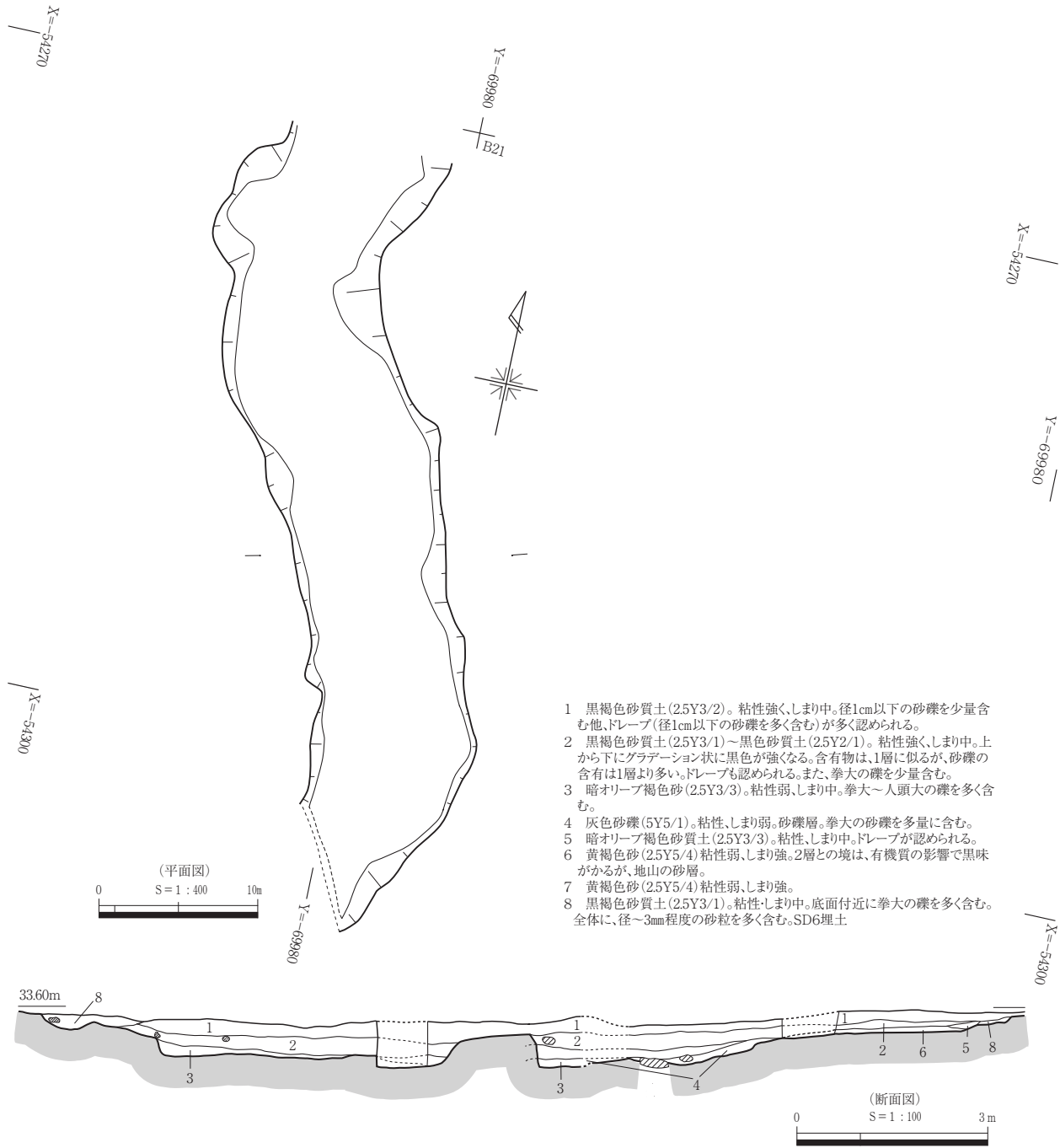
これらの遺物のうち、最も新しい須恵器有蓋高坏 521、土師器甕 523 が、古墳時代終末ごろのものと考えられることから、流路1はこの時期に完全に埋没したものと考えられ、縄文時代早期から古墳時代終末期にかけて流路を変えながら徐々に埋まっていったものと考えられる。

流路3は、長さ25 m以上、幅0.9～2.5 m、深さ0.1～0.15 m程度を測る。底面の標高は、南壁付近で34.270 m、E 19 杭付近で33.695 mを測り、南東から北西方向に流れていたものと考えられる。

埋土は2層に分層できた。上層は黒褐色砂質土、下層は砂礫層である。埋土の状況から、ある程度の水流があったものと考えられる。

遺物は、古墳時代前期から後期にかけての土器が出土しており、図化したものは古墳時代前期の土師器碗 525～527、低脚坏 528、甕 529、須恵器甕 530、土錘 531 である。

その他石器もわずかに出土しており、図化したものには、サヌカイト製凹基無茎石鏃 S 200・201、サヌカイト製平基無茎石鏃 S 202～S 204、黒曜石製凹基無茎石鏃 S 205・206、黒曜石製楔形石器 S 207、硬質安山岩製打製石鏃 S 208～S 210 がある。これら石器の帰属時期は不明であるが、大半の



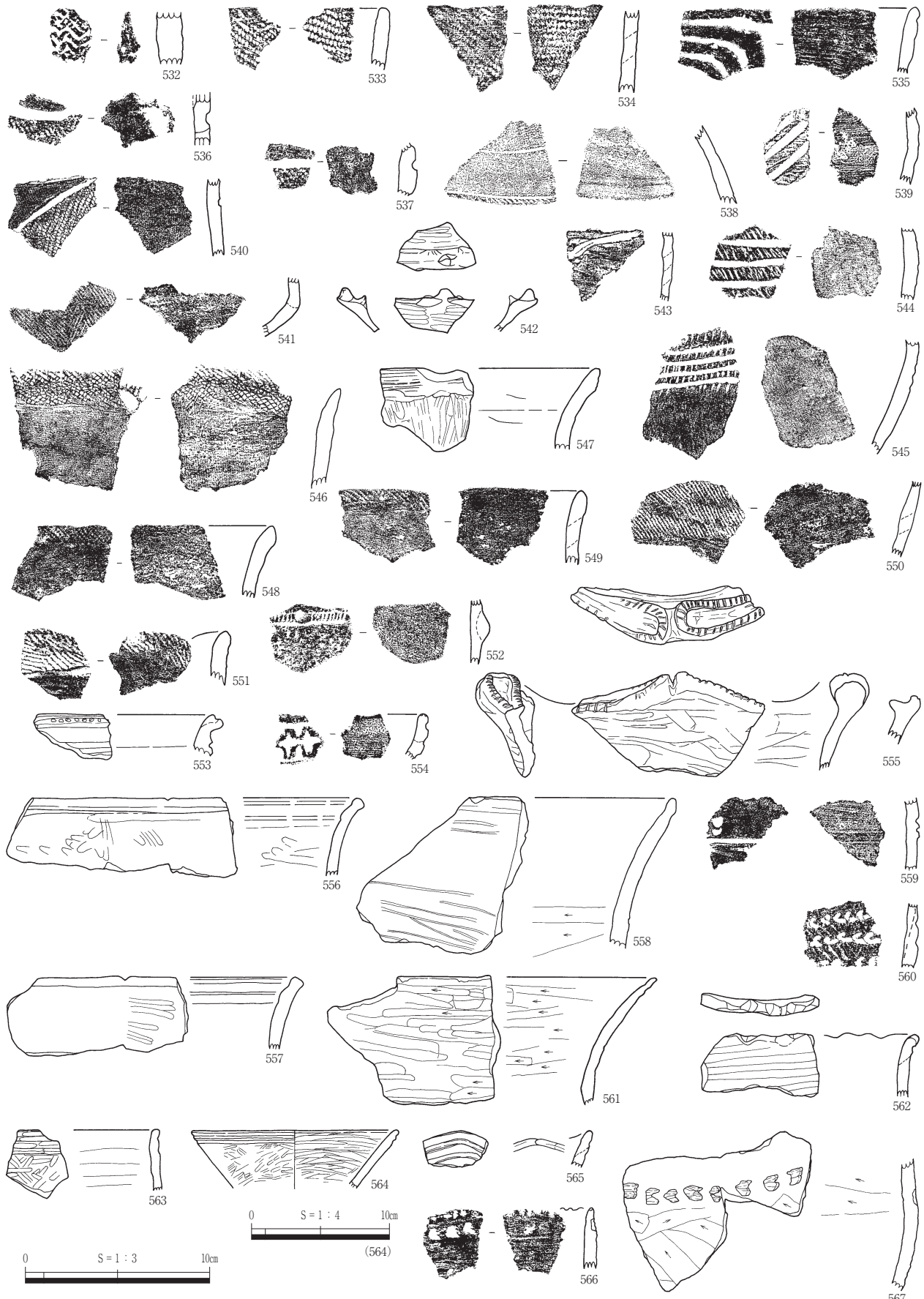
第109図 流路2

ものは縄文時代のものと考えられる。

最も新しい土器である土師器甕 529、須恵器甗 530 が、TK209 併行期、古墳時代終末ごろと考えられることから、流路3はこのころに完全に埋没したのと考えられ、流路1とあまり時間的な差が認められない。

流路2 (第 109 ~ 118 図、PL.66・75 ~ 83・95・97・99)

調査区西側の A 21、B 21・22、C 21・22、D 20・21、E 20・21、F 20 グリッドにあり、標高 32.7 ~ 33.8 m の緩やかに北西方向へ傾斜する斜面地に立地する。流路1に平行するように調査区を



第110図 流路2出土遺物(1)